

## 大会企画パネルセッション

## 子どもたちのキャリアとライフのための言語教育を目指して

## —『中学生のにはほんご』作成の背景とその特徴—

志村 ゆかり（関西学院大学日本語教育センター）

## 1. はじめに

## 1.1 『中学生のにはほんご』を作成した目的

中学生を対象とした日本語総合教科書の開発の目的は、教科学習につなぐための体系的な日本語を提供するためです。体系的に日本語を提供するということは、言い換えれば、どのような日本語をどのような段階で提供するかということになります。つまり計画された可視化できる日本語学習の設計を意味します。これは、外国につながりのある子どもたちが日本社会で成長し、(成人し、)生きていくために重要な視点だと考えています。理由としては、2点挙げられます。

- 1) 教科を学ぶためには基盤となる日本語力を有することが望ましい。
- 2) 現日本社会（特に就活）においては高度な日本語でのコミュニケーション力を有することが優位になる。

また、体系的な日本語教育を提供することは、日本語学習の効率化と支援者の連携を図る手立てとしても有効だと考えています。

## 1.2 日本語総合教科書作成の背景

ここで、上述した目的（教科につなぐための体系的な日本語の提供）にたどり着いた背景を4つの視点別に整理して述べます。

・児童生徒の日本語および学習支援を通して

学校、日本語・教科学習支援教室、フリースクール、個人指導、教育相談等での活動

・生徒、学校教員、地域の支援者、団体関係者、保護者等との交流を通して

生徒たちとは友だちレベル、保護者とは家族ぐるみ、学校教員とは一支援者（または保護者代わり）として関わる等、できるだけ本音や実態を知る関係づくり（例えば、子どもとは公園やカラオケなどに行き、学校の保護者面談に親代わりとして同行し、進学のために進学塾やオープンキャンパスに付き添うなどといったこと）に尽力

・ある生徒との10年（生徒の年齢：16~25歳）にわたる交流を通して

10年深く関わってきた（元）生徒の歩みを通して見た日本社会（の無意識下の排他性）

・外国につながりのある子どもたちに対する日本社会の動きを知ることを通して

年少者日本語教育、第二言語習得、日本語学、国語教育、人権、教育、法律（弁護士会）、移民等、かれらを取り巻く種々の分野の専門家や活動家の方々の公開講座等への参加

このような経験をしていくなかで、常に念頭においたことが、「子どもたちの支援で、足りないこと、かつ、必要なことは何か」ということです。そしてたどり着いたものが「日本語」を計画的に、具体的に、効率的に提供する手立てとしての日本語総合教科書でした。

## 2. 『中学生のにはほんご』の特徴

① 中学学齢期を対象とし、自然習得と外国語学習の両面から日本語を捉え、以下の点に則り作成している。

- ・文脈を重視（場面を利用して、文型の機能を理解する）
  - ・生徒の推測する力を利用
  - ・実際に会話する機会を提供（教科書内の登場人物との疑似会話も有り）
  - ・文型練習や作文を通しての自己表現、意見表明
- ②現場の状況を勘案して、課の構成や教科書全体の構成を工夫している。
- ・文型の導入：日本語教育を専門としない支援者、学校教員がサポートするケースに対応し、生徒が自習することも可能
  - ・対話重視：教科書の登場人物との対話、本文との対話、自分との対話、生徒同士の対話、支援者との対話を促すことで、日本語を通してのコミュニケーションを意識
- ③段階を踏みながら、認知発達にも寄与することを目指している。
- ・ステップ1では「個」、ステップ2では「身近な社会、文化」、ステップ3（出版未定）では、「教科」と、日本語力の向上とともに、抽象的な話題提供を試みている。
- ④最終目標を教科の内容理解としている。
- ・ステップ1から「読む」「書く」を意識し、ステップ2では600~1000字程度の文章を読んで意見を書くタスクを組み込んでいる。また、改まり度の高いスピーチやお礼文といったものに使われる表現や文型を紹介し、社会性も意識して作成している。なお、この最終目標から、文型積み上げ式といっても課によって未習の文型や語を提出しており、文型の練習問題では、例えば使役なら動作主を問うといった読解につなげるための設問も設けている。

### 3. 教科につなぐために

生徒の教科学習支援と本教科書の前段階として作成したサバイバル教材作成の経験から、生徒が教科を学ぶためには、改まり度の高い文章で使われる日本語を理解する力が必要だと判断し、ステップ2を作成しました。ステップ3では、ステップ1、2の日本語力を前提に、各教科（各単元）の内容把握に必要な文章理解のストラテジーを提供し、生徒の自律学習への足掛かりとしたいと考えています。

### 4. ステップ1、2に対する生徒の反応と国際教室の教員のコメント

- ・生徒は「ぼくは1000才です。」などとウケを狙った回答をしたり、空欄を埋める際にターゲット文型がうまく使えず回避して、既知の文型を使って回答したりと、実際の言語コミュニケーションに近い反応を示した。
- ・国際教室の教員からは、生徒に考える力がつき、中間や期末試験中も終了時間まで諦めず解答しようとする姿勢が見られたといった報告を受けている。

このような状況は、本教科書の特徴によって生じた効果ではないかと思っています。

### 5. 今後の課題

- ・ステップ3「教科編」を形にすること：教科の教科書本文を原文のままで、そこに書かれている内容を理解することを目指す。目的は、膨大な知識情報を生徒自身で、自律的に学ぶ力を育てるため。
- ・ステップ2以降で学んだ日本語を表出する機会を設けること
- ・高度な日本語でのコミュニケーション力を育成すること

### 付記

本教科書は JSPS 科研費 17H02350（研究代表者：庵功雄）の研究成果の一部である。